

農家が主役

―あぜみちの会の試み―

福井県農林水産部農業技術開発普及室

参事 玉井 道敏

でんぶんなどの完全自由化、コメの部分受け入れ、食糧制度解体という動きが急速に進んだ。こうした現段階において、日本の消費者と生産者が受ける影響と被害は同じであり、そこからまた、消費者と生産者との連帯による変革が消費者運動の最重要課題として浮き彫りされている。(たゞえば、リ

ンゴの輸入をめぐることは、消費者の選択肢がひろがったのではなく、安全性に問題のあるリンゴを子供たちが食へることにになり、農家は病虫害の危険にさらされることになる、と読みかえることによつて連帯の可能性が開けてくる。

その点では、国際的な連帯とともに、国内の各階層との連帯の可

能性が消費者運動の課題として提起されるべきであろう。

本書は、遺稿集としての性格上必ずしも体系的なものではなく、一部重複している記述も見られる。しかし本書は、二一世紀を目前にした国民諸階層がもたらされている問題に対して実戦的な課題を提起しており、多くの人に一読して

いただきたいと思います。

(大月書店発行)

一九九四年一〇月刊。定価二、三〇〇円

評者

市立名寄短期大学 講師

佐藤 信

「会」、設立前史

一九八九年の初冬、農業試験場経営技術課主催で毎年恒例の農家を主役とした経営研究会を開催した際、夜、酒を酌み交わす中で、若手農業者のリーダーである安実正嗣さんから「我々の大先輩として尊敬している中川清さんの語録を是非とも本にまとめてみたい」という投げかけがあった。この提案は、普及所勤務時代中川清さんと面識のあった経営技術課朝日研究員の想いとも共鳴し、彼からも是非やってみましょう」という力強い意思表示を受けた。

年が明けて、朝日研究員と私の

二人で中川清さん宅を訪問し、「是非、中川さんの本を作りたいたい。編集作業は、我々の手でやるから」ということを伝え、どうにか承諾をいただいた。

そこで早速、その編集団体を作るため農家を主役としながら(農家の人選はいいだしつべの安実さんに依頼)、農家八名と支援機関の七名からなる『中川清氏の出版を支える会』を三月に発足させ、すでに既存原稿の収集等の作業に入つた。この支える会の誕生が、「あぜみちの会」前史となる。

『あぜみちのシグナル』

出版

第3号

MINI
COMMUNICATION
PAPER
SUMMER (夏号)

あぜみち

編集委員発行
あぜみちの会
1994. 7. 25
印刷: 福井県経済課

第4号

MINI
COMMUNICATION
PAPER
AUTUMN (秋号)

あぜみち

編集委員発行
あぜみちの会
1994. 9. 29
印刷: 福井県経済課



「トウモロコシと農夫」 北沢耕作にて 1984. 撮影: 石塚 豊 (印刷)

第5号

MINI
COMMUNICATION
PAPER
[収穫祭特集号]

あぜみち

編集委員発行
あぜみちの会
1995. 1. 20
印刷: 福井県経済課

創刊号

MINI
COMMUNICATION
PAPER
WINTER (冬号)

あぜみち

編集委員発行
あぜみちの会



静かな道、田舎の風景で構ったもの。
福井県内の風景を多く、記事の中心のテーマ
にもなす。アムに似て、中野村の風景に似ている。
そのうちあり、道、道して「道歩き」 (文: 藤田 幸吉 画)

第2号

MINI
COMMUNICATION
PAPER
SPRING (春号)

あぜみち

編集委員発行
あぜみちの会
1994. 4. 25
印刷: 福井県経済課

▲ミニコミ誌「みち」1～5号・表紙の一部を転載

支える会の発足から約一年間に
一回の編集委員会を重ね(編集作
業よりも、飲んでいることの方が
多かつたが、一九九一年の五月に
中川清著『あぜみちのシグナル』
の書名で発刊にこぎつけた。

農家の本を仲間の手で作るなど
あまり取り組んだことがなかつた
だけに、メンバーのよさこびはひ
とおおきく、中川さんの地元の
農協会館で開いた出版記念会には
県内外から一五〇名の仲間が集ま
り、その快挙を盛大に祝うことが
できた。発刊した二〇〇〇部の本
は支える会の人脈をフルに活用し
て、半年でほぼ売り切り、財政的
にも会の今後の活動費を捻出でき
るほどの成果をおさめた。

『あぜみちのシグナル パートII』出版

一度味をしめたメンバー達がこ
れで収まるはずがない。特に、支
える会の八人のメンバーは、県を
代表する古強者ばかりである。ひ
そかに次はオレが書くと満を持し
ているはずであると考えて、事務

局としては次の仕掛けの時を待つ
ていた。

支える会の活動は、飲むことを
中心に続いていたが、一九九一年
の秋、本会と、県内の大野市で活
発な活動を行っている上庄農業経
営者会議という農家のグループと
が交流会をもった際、事務局の我
々から第三弾の出版計画を切り出
した。これがスナリと決まり、
複数の農家の共同執筆、という形
でパートIIをまとめることとなつ
た。同時に支える会の名称をより
普遍化するため、最初の書名に因
んで「あぜみちの会」と改称し、こ
こに、「あぜみちの会」が正式に発
足した。

続編は「あぜみちの会」の会長・
名津井萬さんを中心として、上良
茂さん、川崎秀男さん、安実正嗣
さん、中川清さんの五人が執筆し、
書名を『あぜみちのシグナル パ
ートII』として、一九九三年八月
に二〇〇〇部発刊した。この時も、
名津井さんの地元の農協を会場と
して出版祝賀会を開催し、約一五
〇名の仲間が集まったが、特にた
くさんの若い農業者の参加をみた

収獲祭
文芸作品展示場



▼ミニコンサートで披露された
勇壮な太鼓のひびき



▼「新鮮な野菜の即売会」
消費者と生産者の交流の輪がひろがる



ことが注目された。
五人の執筆者はいずれも夫婦同
伴で出席して晴れの舞台に立ち、
至福のひとつときをすごされた。

ミニコミ誌

『みち』の発刊

自分達の手で本を二冊発行する
ことにより、すっかり自信をつけ
た「あぜみちの会」がこのままとど
まるはずがない。そして、この会は
さらに次のステップへと踏み出す。

会の今後の方向を検討する中で、
次は若い農業者や女性の意見をま
とめられないかという提案が出さ
れた。しかし若い農業者や女性の
会員の手薄な本会にとつて、すべ
に彼等を中心とした本をまとめる
ことはハードルが高すぎる。それ
なら彼等が広く気軽に投稿できる
場を作つてはどうかといふことだ。
季刊のミニコミ誌を発行すること
になった。会員の人脉で若い農業
者や女性の普及員を引き入れて一
五人からなるミニコミ誌のための
編集委員会を構成し、一九九四年
一月に創刊号を出すことができた。

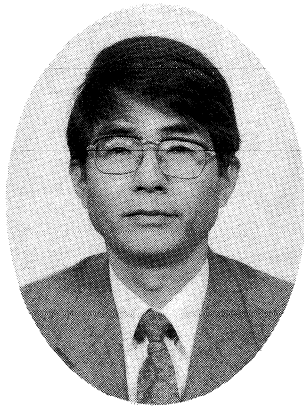
名称はあぜみちの「あぜ」をとつ
て「團場」の「あぜ」と心の「あぜ」をと
ることが農家の意識改革につながる
かという思いをこめて「みち」と
し、一〇〇〇部発行した。

これまで約一年間のうちに特集
号を含めて五号を発行、毎回約三
〇〇人の人が投稿し、その歩みは順
調である。年会費一〇〇〇円で、
三〇〇人の会員を持ち今のところ
収支はトントンであるが、コミ
で読者や投稿者の輪は確実に広が
っている。

さらに「あぜみちの会」のメンバ
ーも「みち」の発行を契機として
三〇人と倍増し、多様性を増し、
『みち』の発行が会の活動範囲と
その可能性を大きく拡げることにな
った。

収獲祭の実現

一九九四年一月三日、安実
農場は約一〇〇〇人の人でにぎわ
った。あぜみちの会主催、安実農
場を会場とした念願の農家主導の
収獲祭が実現した。行政や農業団
体主催の農業フェアはたくさん



玉井 道敏 (たまい みちとし)さん

1942年福井県小浜市生まれ。
1967年京都府立大学農学部農学科卒業、
福井県庁で農業技師として28年間勤務。
現在に至る。
その間試験研究、行政、教育、普及と
幅広い仕事に携わり、現在、農業経営
の専門技術普及員として、普及員の指
導にあたっている。



▲
◀ ここでも地域の人達の輪が
大きくひろがっていく
(フランス料理の試食会)



▲ ハクサイの収穫作業体験

以上みてきたように、農家の、
一言のつぶやきからはじまって六
年、この集団の取り組みは大きく

「会」の展望

老若男女、生産者と消費者など
多種多様な人が集まり、多彩な交
流が図られた。

当日は、酒井福井市長を迎えて
オープンセレモニーを行い、安美
農場の作業場と圃場を開放してそ
こを会場とし、ピアノとフルートの
コンサート、フランス料理の試
食会、子牛とのふれあい、ハクサイ
の収穫体験、墨絵・絵画・写真
・俳句・手芸など会の農家のメン
バーの手づくり作品の展示等が行
われ盛りだくさんなフェアとな
った。

行われているが、農家を舞台とし
農家主役の収穫祭は殆ど例をみな
い。そういう意味でも今回の試み
の意義は大きく、事実、収穫祭に
参加した多くの農家が、これから
は自分の所でもやってみたいとい
う抱負を語っておりそのインパ
クトは大きい。

輪を広げ次々と新しい試みを実現
している。それはアメリカのよう
な活動である。従来のピラミッド
型のタイトな組織によるのではなく、
実に柔軟で予断をゆるさない活動
が融通無碍に次々と試みられてい
る。

今、会では「あぜみちのシグナ
ルのパートIIIを発刊すべく、仕
掛けをしている。それは農業に主
体的に取り組み農村に生きる女性
の発言で構成される予定である。
既に約二〇人のはつらつとした農
村女性による編集委員会がもたれ、
男性会員はその迫力と柔軟性に圧
倒されている。

自分達で作った手づくりの本を
手にしながら自信に満ちあふれた
彼女たちの素晴らしい姿を見られる
日も間近い。

「あぜみちの会」の設立に携わり、
現在は会員の一人としてこの会に
かかわりながら、会がこれから何
をしてかすのか、どきどきしながら
その活動の展開に注目している
自分でもある。